

023-06

「ルミパルス SARS-CoV-2 Ag」導入後における当院検査部の運用について

○嘉瀬 文孝, 星 晴彦, 大内 和真, 原口 摩耶,  
河合 由佳, 越後 柚子  
大森赤十字病院検査部

【背景】

「ルミパルス SARS-Cov-2 Ag(以下 ルミパルス)」(富士レビオ)は抗原の定量的な測定が可能であるため、従来の抗原検出用キットよりも感度が高く、遺伝子検査と同様に鼻咽頭ぬぐい液による検査は有症状者、無症状者問わず確定診断に用いることが可能となっている。当院においても2020年8月24日からルミパルスによる検査を本格的に開始している。

【現段階での運用】

自施設ではルミパルス以外に遺伝子検査として全自動遺伝子解析装置「ミュータスワコー g1(以下 g1)」(富士フィルム和光純薬)を使用している。また、外注における遺伝子検査はSRLに委託している。ルミパルスを稼働するにあたり、遺伝子検査との一致率を検討した結果、2020年8月現在で2例(n=12)において結果の乖離【抗原(+), 外注(+), g1(-)】がみられている。しかし、外注検査と抗原検査の結果はおおむね一致しており、現段階では抗原検査の感度・特異度は信頼できるものと判断している。そのため、緊急入院や緊急処置が必要な患者のスクリーニング検査はルミパルスを使用しており、現在は24時間体制で検査をしている。一方、入院に急を要さない患者のスクリーニング検査は従来通り遺伝子検査(外注)にて行っている。今後の状況の変化により、発表までには多少なりとも運用の変更は考えられるが、当日は運用方法に加え、ルミパルスと遺伝子検査の比較データなども報告する予定である。

024-01

*Corynebacterium riegellii* による閉塞性尿路感染により高アンモニア血症、意識障害をきたした1例

○香月 万葉<sup>1</sup>, 山口 健太<sup>1</sup>, 田口 舜<sup>1</sup>, 佐野由佳理<sup>1</sup>,  
福岡 麻美<sup>2</sup>

地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館検査部<sup>1</sup>, 地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館感染制御部<sup>2</sup>

【序文】高アンモニア血症は意識障害の重要な原因の1つであり、肝障害に起因することが多い。今回ウレアーゼ産生 *Corynebacterium riegellii* による閉塞性尿路感染により高アンモニア血症、意識障害をきたした症例を経験したので報告する。【症例】80歳女性。20XX年7/2両側水腎症を指摘された。その後食欲低下し、7/20意識障害のため当館へ搬送された。GCS E4V4M6、四肢の麻痺なく、頭部CT、MRIで急性期病変なし。血中アンモニア 335 N-μg/dL と上昇していたが、肝機能障害なし。排尿なく尿道カテーテルを留置され、尿検査所見より尿路感染による高アンモニア血症を疑われCMZ投与された。その後も意識障害蔓延し、7/22けいれん出現。尿塗抹検査でグラム陽性桿菌を多数認め、抗菌薬をVCMに変更した。7/23 CTで両側水腎症増悪を認め尿管ステント留置されたところ意識障害改善し、血中アンモニア正常化。8/1よりAMPC内服に変更、8/4退院となった。【細菌検査】尿同定検査 *Corynebacterium riegellii* 10<sup>6</sup>, *Actinotignum schaalii* 10<sup>6</sup> (VITEK MS(バイオメリュージャパン))。VITEK2(バイオメリュージャパン)を使用し、*C. riegellii* のウレアーゼ活性を確認した。【結語】ウレアーゼ産生菌による尿中尿素のアンモニアへの分解に閉塞性尿路障害を合併すると、高アンモニア血症を来すことがある。肝疾患のない高アンモニア血症を認めた場合には、ウレアーゼ産生菌による尿路感染症を鑑別する必要がある、症状の改善には抗菌薬投与だけでなく尿路の尿閉の解除が必須である。

024-02

臨床への情報提供により治療に貢献し得た *Staphylococcus pseudintermedius* 感染症の一例

○村 竜輝<sup>1</sup>, 麻生 都<sup>1</sup>, 森田 恵美<sup>1</sup>, 金谷 和美<sup>1</sup>,  
河村 佳江<sup>1</sup>, 多賀 允俊<sup>1,2</sup>, 西田 裕啓<sup>2</sup>, 大楠 清文<sup>3</sup>,  
飯沼 由嗣<sup>1,4</sup>

金沢医科大学病院中央臨床検査部<sup>1</sup>, 金沢医科大学病院薬剤部<sup>2</sup>, 東京医科大学微生物学分野<sup>3</sup>, 金沢医科大学臨床感染症学<sup>4</sup>

【はじめに】*Staphylococcus pseudintermedius* は犬などの常在菌であり、近年、伴侶動物が感染源と考えられる症例が増加している。

【症例】

40代男性。先天性水疱症で当院皮膚科に通院中の患者。体表面にびらんや潰瘍、水疱を伴う状態が持続し、季節により変動はあるものの症状の増悪を繰り返していた。2019年X月に左上肢および背部の創部培養が提出された。

【微生物学的検査】

36°C, 24時間培養で血液寒天培地およびトリガルスキー改良培地上で *Staphylococcus* 属を疑うコロニーが純培養で発育した。MALDI biotyperでは *S. pseudintermedius* (score value 2.00以上) が候補に上がり、本菌種に特異的な遺伝子領域(*nuc gene*)のPCRが陽性であることを確認した。

【経過】

主治医に対して検出された *S. pseudintermedius* が犬などの常在菌であることの情報提供を行い、接触歴の有無の確認を提案した。患者は自宅で犬、猫を飼育しており、感染源と考えられた。ミノサイクリン錠、ゲンタマイシン軟膏0.1%投与に加え、犬、猫の接触後の手洗いを指導することで1ヵ月後の培養で左上肢、背部共に陰性化した。

【考察】

患者は皮膚のバリア機能が脆弱な状態であり、自宅の犬、猫からの再感染のリスクは高いと考えられた。本症例では主治医へ菌の情報提供を行うことで、抗菌薬治療に加えて患者に対して感染源の情報共有、手洗いの指導といった感染制御に有効な対策を講じることが可能であった。

024-03

出生時ニューキノロン系点眼薬使用の再検討と妊婦検診での淋菌検索の必要性が示唆された新生児淋菌性結膜炎の一例

○亀山 和明<sup>1</sup>, 大竹 正悟<sup>2</sup>, 志牟田 健<sup>3</sup>, 高橋 英之<sup>3</sup>,  
清水 悠衣<sup>1</sup>, 大上 朋子<sup>1</sup>, 笠井 正志<sup>2</sup>

兵庫県立こども病院検査・放射線部<sup>1</sup>, 兵庫県立こども病院感染症内科<sup>2</sup>, 国立感染症研究所細菌第一部<sup>3</sup>

【はじめに】*Neisseria gonorrhoeae* は性感染症の一般的な原因菌であるが、新生児結膜炎の症例は非常に稀である。また、無治療では角膜穿孔を起こし、失明につながる重大な疾患である。今回、新生児結膜炎のため入院した生後9日の男児の眼脂から *N. gonorrhoeae* を分離し、治療しえたので報告する。【症例】39週3日、3,186g 経膈分娩で出生した男児。母体のクラミジアスクリーニング検査は陰性であり、出生時にニューキノロン系点眼薬を投与された。日齢7より左眼脂、日齢9に発熱を認め、救急外来を紹介受診した。Ceftriaxone(40 mg/kg)を静脈内投与した上で入院し、入院3日目には眼脂も減少し解熱した。退院2週間後の眼科診察でも後遺症を認めなかった。【微生物学的検査】入院当日、*N. gonorrhoeae* による新生児結膜炎が疑われ眼分泌物が提出された。グラム染色で白血球3+, 口腔内常在性 *Neisseria* spp.よりやや大きめのグラム陰性双球菌を少数認めた。菌名精査は国立感染症研究所に依頼し、MLST解析で *N. gonorrhoeae* ST13840型と同定した。薬剤感受性試験はペニシリンG, セフィキシム, セフトリアキソン, シプロフロキサシン, アジスロマイシン, スペクチノマイシン, テトラサイクリンで実施し、シプロフロキサシンにのみ耐性であった。【まとめ】本症例は出生時の点眼抗菌薬の再検討、妊婦スクリーニング検査による淋菌検索の必要性を認識できた症例であった。